

令和 5 年度 特色ある教育実践研究校 報告書 宇品中学校

1 学校の課題

※データ等を基にした学校の課題

- R 3 年度不登校生徒数：5 2 名で、R 4 年度はさらに増加傾向。
- 保健室にメンタル面の相談で週 2，3 回来室する生徒数が約 2 0 名。

2 研究主題

非認知能力を育み、自己有用感を高める教育活動の充実

3 取組内容

※ 1 の課題解決に向けて、重点的に取り組む項目とその具体

- (1) ML B 教育の実施に加えて、各学年とも年間 3 時間の心理教育プログラム（身近な問題解決、ストレスへの対処、メタ認知）を実施した。
- (2) 非認知能力を高めるため協同学習の実施、振り返りの機会を増やした。
- (3) 生徒が抱える多様な課題に対応するため関係機関連絡協議会（児童相談所、区役所、警察署、スクールソーシャルワーカー）を隔月に開催した。
- (4) 帰りの SHR の時間 5 分間で、週に 2 回コグトレを実施した。
- (5) 週に 1 回、コンサルテーション会議を開催し、配慮を要する生徒への支援について協議する場を持った。（参加者は、管理職、生徒指導主事、教育相談・支援主任、各学年主任、特別支援教育コーディネーター、養護教諭、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー）

4 検証結果

- 学校評価生徒アンケートで「自分の長所が言える」に対する肯定的回答
結果 8 0 % 【達成目標 8 0 %】
 - ・ 上半期のアンケートでは 7 3 % であったが、下半期のアンケートで 7 % 上がった。
- 年間 9 0 日以上欠席の生徒のうち関係機関等へつながっている生徒の割合
結果 5 8 % 【達成目標 6 0 %】
- ML B 教育の生徒の理解度（アンケートによる）
結果 9 0 % 【達成目標 9 0 %】

5 研究成果

【MLB教育・心理教育に関すること】

- 自殺しようと考えている生徒のことを他の生徒が教員に教えてくれて、未然に対応することができた。伝えてくれた生徒は「授業で深刻な悩みを聞いた時には大人に相談するように学んでいたから先生に相談した」と話した。
- 教員やスクールカウンセラーへの相談が増えた。
- 心理教育に生徒は意欲的に取り組んでいる。
- MLB教育や心理教育で学んだことを授業後にはしっかりと意識できているが、そのことを維持していくための日常的な取組について、教員が共通認識を持つ必要がある。
- ★ MLB教育と心理教育の学習内容の関連性を高めることによって、より高い効果が得られると思われる。
- ★ MLB教育の実施を保護者に周知し、授業参観で行った。参加者は少なかったが参観された保護者も興味深く授業を参観されていた。家庭でMLB教育の内容が話題となることが増えればより効果が高まると考え、今後も授業参観での実施は継続していきたい。

【協同学習に関すること】

- 令和5年5月以降、授業の中で協同学習の場면을意識的に仕組むことが増え、生徒も意欲的に授業に参加していた。
- 授業によっては振り返りの時間を十分に保障することができず、中途半端な形になったり、授業時間を延長してしまったりすることがあった。

【関係機関との連絡会議に関すること】

- 生徒の抱える課題を把握した当初は具体的な支援が見通せない事案もあったが、関係機関との協議を重ねる中で、機関とのつながりを作れる生徒が増えてきた。協議対象とした生徒については何らかの成果が現れた。
- ★ それぞれの機関で様々な情報を各機関で集め、共有することで具体的な支援方針や、支援のための役割分担につながることを実感した。

【コグトレに関すること】

- 新たな取組としての負担感が出ないように、週2回から始めている。「やってみよう」という意識付けはスムーズにできた。
- 夏季休業中に広島大学大学院から講師を招いて研修をした。実際に教員がコグトレをしながらの研修で、積極的に参加する教員が多かった。
- 現状では「やってみよう」の段階を脱していない。
- ★ 今後はより効果が見込める実施方法を研究する必要がある。例えば、課題をより短時間でできるように意識させるとか、実施後に課題を効率的にするために工夫したことを生徒間で振り返り、より効率的に課題をクリアする方法の共有などが考えられる。
- 教員やスクールカウンセラーに相談する生徒の人数が増えた。
- 不登校生徒数は依然として増加傾向にある。
- ★ MLB教育、心理教育で学んだことを日常生活につなげ、身近な小さな課題を克服する経験を積みさせるような取組が必要である。